親園中学校道徳だより

令和４年　１１月３０日

◎１学年の実践　「形見」　主題名：かけがえのない家族　授業者：長谷川

長期休み明けの新学期、学校に行きたくないと思っていた結花は、１階の和室で話をしている母と祖母の話し声から、きれいな着物の存在を知る。結花はその着物を形見に欲しいを冗談を言う。しかし、母は「結花にはもっと重要なものをあげたでしょ」と言った。それは何か気になる結花。実は結花は母親が妊娠四か月の時に切迫流産で入院して生まれてきたのだった。その間は父が兄の送り迎えや家事を行っていた。元気に産声を上げた結花だったが、とても小さく生まれたので、周りはたいそう気遣い、栄養のことや育児情報を片っ端から集めて祈るような思いで育てられたのだった。重要なものとは・・・それを聞いて結花は毎日の当たり前が特別なことのように思えてきた。

生徒の感想（一部抜粋）

- 家族といる毎日が当たり前であったが、毎日感謝をして「ありがとう」の気持ちをもって過ごそうと思った。
- 家族が今まで自分にしてくれていた「恩」に気付かなかったが、それを大切にして家族に関わっていきたい。
- 普段、家族が自分のことを大切に思っていることが分かるからこと、今の関係を続けていきたい。
- 今まではあまり意識をしなかったが、大切な家族として気を遣いながら家族と家族と関わっていきたい。

◎２学年の実践　「こんなとき、どうしたらいいの」　主題名：合理的配慮　授業者：君島

障害のある人との共生する社会の実現に向けて、生活場面で起こりうる事例を通して、どうしたらよいかを考え、議論するワーク型資料である。また、あわせて平成25年6月に制定され、平成28年に4月に施行された「障害者差別解消法」についても理解を深めたい。

弱視・視覚障害者・車椅子利用者の方の身の回りには社会的障壁（バリア）が偏在していることに気づき、「合理的配慮」を通じて、障害についての理解を深め、共生についての考えを深めたい。

生徒の感想（一部抜粋）

- 全部やってあげるのではなくて、相手が必要としていることだけやってあげる。
- 相手が何を必要としてるかを聞いてそれにあった行動をする。全部やってあげるのはちょっと違う気がするから相手が必要としてるときには助けてあげる。
- 配慮する自分ではなく、される側が何を求めているかを聞いてから行動する。
- 相手がどうしてほしいのかを考えて行動する。

◎３学年の実践　「苦悩の決断」　主題名：公徳心・人類愛　授業者：粕谷

1940年7月の朝、リトアニアの日本領事館で働いていた杉原千畝はある光景に出会う。領事館前に２００人を超えるユダヤ人が並んでいた。ユダヤ人は戦場から逃れるため、日本のビザ発行を求めた。もちろん、一度に多くの人へのビザ発行は許される行為ではない。一晩考えた千畝はビザを発行することに。寝る間を惜しんでビザを書き続け、結果、多くのユダヤ人を救うことになった。

生徒の感想（一部抜粋）

- この話はとても考えさせられました。どちらを選択しても後悔は残ると思います。これから苦悩の決断をしなければならなくなったときに、今日の授業と同じように考えて、決断したいと思います。
- 杉原さんと同じ状況になっても、自分が死ぬ可能性を犯してまでも助けたいとは思えないと思う。ただ、その決断は一生後悔しそう。
- 僕は杉原千畝の立場だったら、家族の安全・安心を優先して、ビザは発行できなかったと思います。
- 自分も今後いろいろな決断をしなければならない場面で、自分にとって何が一番大切なのかを考えられる人になりたい。
- 命は比べることができない。決断をするときに、できるだけどちらも助かる方法を探したいと思った。
- 自分にとって一番大切なものを犠牲にしてでも、大勢の命を優先するほどの苦しみを味わった杉原千畝さんの強い意志を感じた。